

大昌寺だより

令和8年7月発行

盆入り法要

7月23日(木)

午後5時より

大昌寺本堂にて

真夏の日、全身に向かってピューッと吹いてくる一陣の風を、昔の人は「極楽の余り風」と呼びました。心地良い風に身も心も安らぐ時、「この風はきつとご先祖さまがいらつしやる極楽浄土から吹いてきているに違いない」と感じた人がいたのでしょう。また、ある古歌には、次のようなものがあります。

風が吹く 佛来給う 気配あり

(高浜虚子)

サツと吹いた風の中に、先立った友人が帰ってきたように感じたことを詠んだ歌とされています。このように、古くから人々は、何気ない日常の中に亡くなった方々のぬくもりや気配を感じ、その存在を身近なものとして拝んできました。まさに、その心が日本独自の伝統行事として形になったのが「お盆」です。

お盆の起源は、中国で行われていた「盂蘭盆会」という親への孝行を目的とした仏教行事にあります。これが日本に伝わり、推古天皇14年(606年)7月15日に初めて宮中にて法要が行われ、その後、先祖供養の信仰や日本独自の儀礼と融合し、現在のような亡くなった方々を

お迎えするお盆の行事に発展していったとされます。江戸の年中行事を解説した『東都歳事記』(1803)の「7月13日の条」には次のように記されています。

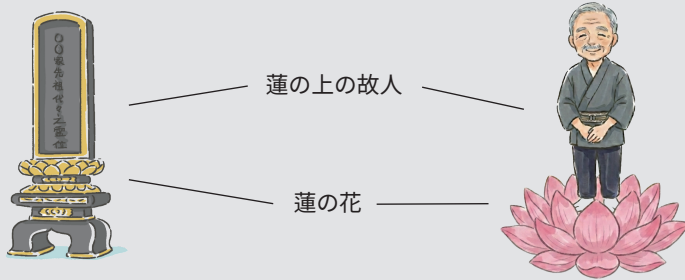
今日より十六日に至るまで、件々の供物をささげ、先祖を祀る。この間、僧を請じて誦するを棚経といふ。十三日の夜、迎え火とておがらをたく。十六日朝送火とてまたおがらをたく。この内を俗に盆中といふ。諸人、先祖の墳墓に詣づ

この記述からも、江戸時代にはすでに広く親しまれ、ご先祖さまを供養する行事として定着していたことがわかります。7月の行事でしたが、明治6年(1873)にグレゴリウス暦が導入されたことを契機に一年間が354日から365日に変わり、7月に行う新暦の盆、8月に行う旧暦の盆と別れました。また、日野の地域はカイコの養殖の時期を避けて10日遅れの蚕盆が行われるようになりました。

ぜひ、お盆の期間には、日ごろの忙しさを離れる中で、先立った方々を今一度身近に感じていただけたらと存じます。それぞれのご家庭、それぞれのやり方でご供養して参りましょう。

位牌デザインの由来

一般的なお位牌の足元（台座）を見ると、蓮の花びらを形どった彫刻があります。浄土宗における蓮は、泥の中から立ち上がり、泥に染まらず美しく清らかな花を咲かせることから現世（泥）と極楽（華）を象徴する花とされ、お経には「極楽浄土に生まれる者は蓮の花の中から生まれる」と説かれています。生前にいろいろな苦勞や悩みを抱えていた故人も、臨終後にはすべての苦しみから解放され、極楽浄土へと往生するようにとの願いを象徴的に表しているものとされています。



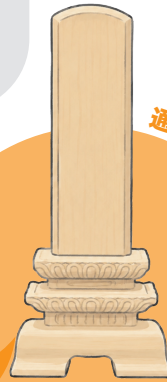
いはい 位牌

「位牌」は、亡くなった方の戒名が刻まれる仏具で、故人を偲び、手を合わせるための依り代です。お葬式の祭壇のなかでは最も大切なものとされます。

「位牌」という名の由来は諸説ありますが、一説によると、もともと中国の宮廷で、亡くなった高官の「官位（役職や身分）」を木の札に書いて祀っていたことが由来で、「位を記す牌（ふだ）」から位牌と呼ばれるたとされます。

※神聖なものとして祀る「齋（いはい）」から「齋木（いはいぎ）」↓位牌になったとする説もあります。

通夜・葬儀で用います



しらき 白木位牌

亡くなったばかりの人のためには、その場で急ぎ作った木製の仮の位牌「白木位牌」を用います。

四九日法要以降、仏壇へ



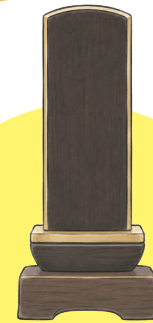
本位牌

本位牌とは四九日法要以降に仏壇に祀る正式な位牌です。様々な種類があるため、故人様の人柄や仏壇の雰囲気に合わせて、お選びになると良いでしょう。

四九日法要で魂入れをする

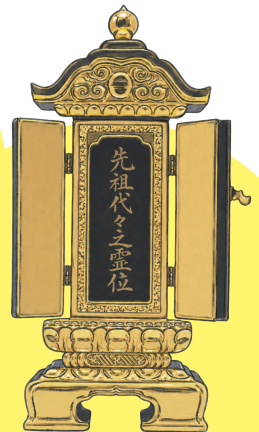


伝統的な位牌の枠にとらわれない自由なデザインと、高いインテリア性が特徴で、現代のライフスタイルに合わせた新しい供養のカたちとして近年登場しました。



モダン位牌

ご先祖様の位牌が増えてお仏壇に収まりきらなくなった場合は、「繰出位牌（くりだしいはい）」という、中に何枚もの木札を収納できるタイプのお位牌にまとめることもできます。



繰出位牌

位牌選びのポイント

- ご本尊より 小さなサイズ
- お仏壇の 内部寸法を確認
- 先祖代々の お位牌との調和

お位牌の値段は、使用される材質や、加工の工程数や難しさによって値段が大きく変動します。ご予算に合わせてお選びください。

大昌寺の境内解説

【山門の歴史】

大昌寺の山門。素朴な疑問として、「平地にあるお寺なのに、なぜ『山門』と呼ぶのだろうか?」と思われるかもしれません。これには、仏教の歴史が関係しています。

古来、中国や日本では、厳しい修行を行う僧侶たちは俗世の喧騒を離れ、静かな「山」にお寺を建てて暮らしていました。比叡山(延暦寺)や高野山(金剛峯寺)

などがその代表例です。この名残から、お寺そのものを「山」と呼び、お寺の称号(山号・さんごう)にも山の名が使われるようになりました。

そのため、平地にあるお寺であっても、その正面玄関は「山への入り口」という意味を込めて「山門」と呼ばれているので



近附寺昌大野日 (勝名野日)

▲大昌寺山門前は田んぼが広がり、米の収穫が行われていた

大昌寺の山門の額裏には右下の画像のような彫り物が残されています。

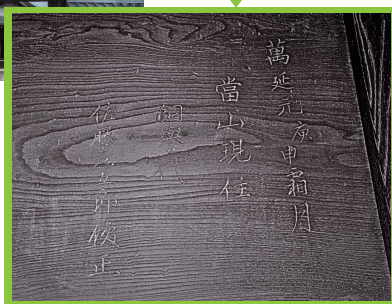
また、山門は「日常の世界」と「非日常の世界」の境界としての役割があり、そこを通ることは、世俗の忙しさや煩わしさから離れ、清らかな心になって仏の世界へと入るという、一種の儀式とされています。

江戸時代後期の寺院は、人々の信仰を支えるだけでなく、集会所や役所の出張所として

ており、そこには「万延元年(一八六〇)十一月」に山門が建造されたこと。当時の住職が「銅譽上人」であり、寄進者の名前が「佐藤彦五郎俊正」であったことが記されています。佐藤彦五郎とは、まさに新選組誕生を支えた日野の有力者で、新選組最大の理解者にして影の生みの親とされる人物です。



山門の額の裏側



▶ 萬延元年寅申霜月 當山現住 銅譽代 佐藤彦五郎俊正

コナリ

震災とシロアリ



▶シロアリが見つかった柱

東日本大震災の最中、境内に避難していた現住職は、山門が倒壊しそうなほど大きく前後に揺れていたのを目の当たりにしたといいます。なんとか山門は持ちこたえましたが、改めて老朽化が明らかとなり、その後、大規模な修理を行いました。傷みの進んだ古材は新しい木材へと取り替えられ、屋根には新たな瓦が葺かれ、新しい姿の山門へと変貌を遂げました。ところが今年、シロアリによる被害が見つかり、早急に駆除作業を行うこととなりました。

仏教では「諸行無常」と説かれます。形あるものは必ず変化し、やがて失われます。山門も例外ではありません。震災を超え、シロアリを乗り越えた姿となった山門は「変わらないこと」の尊さではなく、「変わりながら受け継がれていくこと」の尊さを伝えているようですね。

地域社会の結びつきを支える存在でもありました。日野宿の名主を務めた彦五郎が、自らの菩提寺である大昌寺の山門建立を進めた背景には、先祖への報恩や信仰心に加え、寺院を護持し地域に貢献しようとする思いがあったものと考えられます。

また、山門が建立された万延元年は、幕末の動乱が本格化しようとする時代でした。その十一年前の嘉永二年

(二八四九)には、日野宿で「日野大火」と呼ばれる大火災が発生し、宿場の大半が焼失したと伝えられます。大昌寺は難を逃れましたが、彦五郎の自宅をはじめ多くの建物が被害を受けました。そうした出来事を経て建立されたこの山門は、復興を遂げつつあった当時の日野宿の歩みを今に伝える建造物でもあるのでしよう。

また、この山門は、当時の優れた職人技を、静かに見守りながら、今日も変わらず参拝者を迎えています。